
はじめに



伊東祐郎

伊東祐郎 ただ今より、東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター協働実践研究「野山班」のプレフォーラム「共生のまちづくりに向けたプログラムとは——『のしろ日本語学習会』の実践から——」を始めさせていただきたいと思います。総合司会を務めます本センター運営委員の伊東です。開会に先立ちまして、多言語・多文化教育研究センター長の高橋正明から、ご挨拶を申し上げます。

高橋正明 皆さんこんにちは。簡単にこのセンターのご紹介と、協働実践研究プログラムの趣旨についてお話ししたいと思います。

もともとこのセンターは実践的な試みから始まりました。2003年に本学の学生が在日ブラジル人児童のための学習支援活動を始めました。そして翌年10月には大学としてこの活動をバックアップするために「多文化コミュニティ教育支援室」をつくりました。その活動をやっていく中で、実是在日外国人の問題というものがもっと広がりを持った問題であるということが分かってきました。設立された「多文化コミュニティ教育支援室」には学外からいろいろな要請がありました。そうした中で、やはり大学としてもっと全面的に取り組んでいこうということで、06年4月にセンターを立ち上げたわけです。

センターの活動として、教育、研究、社会連携という3つの柱を立てまして、教育については多言語・多文化時代にふさわしい教養を持った人材の養成を目標に掲げ、研究については協働実践研究という形で問題を立て、そしてその他にさまざまな社会連携活動に取り組むことになりました。

協働実践研究については大きな狙いがあります。ひとつは、協働実践ということで、現場の実践者と研究者との間の連携の中で研究活動をしていこうということです。単に研究のための研究ということではなく、あるいは業績づくりのため

の研究ではなく、実際の問題解決のために現場の中から出てきたさまざまな諸課題に正面から取り組んでいく研究をやっというここと、実践者と研究者が同じ立場で研究を進めていく形でやってきました。

そのことともつながるのですが、私たちとしては、非取奪型の研究ということのスローガンとしました。特に在日外国人の問題というのは、大学院生や研究者が大勢この問題に取り組んでいて、いろいろ論文を書いています、例えば私たちが地方の自治体などに行きますと、市長さんから、「いろいろな調査をしに来たけれども、実際にそれがどういう形でまとめられていたのかという報告は全然返ってこない、現場はただ話を聞かれるだけだ」という厳しいお言葉をいただき、そうした取奪型ではなく、現場の中で出てきた問題を取り上げながら、これらをより深く考えて解決の道筋を見つけ提示していこうという趣旨で始めました。

実際に研究を進める上では、例えば教育とか労働といったように、これまでのような縦割りの区分で進めるのではなく、さまざまな分野の専門家が混在する5つの班グループに編成して行っています。例えばある班は経済団体の職員と精神科医が組んで、長野県の上田市を舞台に、地域において労働者とその子どもたちの問題にどうやって全体的に取り組んでいけばよいかを研究しております。あるいは川崎市においては、教育学者と国際交流協会出身の職員が一緒になって子どもたちの教育をめぐる研究をしています。今日のプレフォーラムは、その中のひとつの「地域日本語教育プログラムの在り方」を研究している班によるものです。協働実践研究の最終目標年度は08年度ですが、12月1日、2日には中間報告ということで全国フォーラムを予定しておりますので、そちらの方にもぜひご参加いただければと思います。

本日は、土曜日にもかかわらずおいでいただきましてありがとうございます。

伊東 ありがとうございます。それでは、本日のプログラムの全体の流れを確認させていただきたいと思います。1部、2部、3部の3部構成になっております。第1部は、「のしろ日本語学習会」の紹介と事例報告。そして休憩を挟み、第2部で報告への質疑応答およびコメントを、第3部ではパネルディスカッションを予定しております。それでは、本学特任研究員の野山広さんにマイクを渡して、プレフォーラムを始めさせていただきたいと思います。



高橋正明